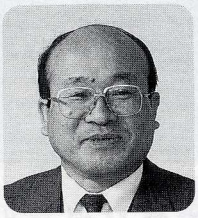
卒業生・修了生を送る言葉

来たるべき二十一世紀「心の時代」を生きるにあたって

広島大学長 ❖ 原田康夫



皆さんはまもなく広島大学を卒業、あるいは大学院課程を修了して社会に出られるわけでありますが、皆さんの門出に際し、一言お祝いを申し上げます。

各学部の課程を終えて社会へと巣立つ人たち、大学院に進んでさらに学問を深める人たち、皆さんの一人ひとりにとって、今年は大きな節目の年であります。

本学は二十三年前に東広島市への移転を決めましたが、その後いろいろな事情から、移転は大幅に遅延し、諸君にも東広島市の皆さんにも、たいへんなご迷惑をかけました。しかし、ようやくこの三月をもって統合移転が完了し、当初の目標であった「統一された大学」が実現することになりました。

従って広島大学は、今年から真の総合大学として、新たな一歩を踏み出すことになります。今後、この広大なキャンパスは年々整備され、今卒業して行く諸君にとっても、母校としていよいよ誇るに足る大学となってゆくことでしょう。諸君は、その躍進へのスタートであるこの記念すべき年に、輝かしい未来を担って卒業するわけであります。

さて昨年は、アジア競技大会が地元広島で開かれ、多くの諸君が、ボランティアとして、また選手としてそれに参加したという、諸君にとっても思い出の多い年でした。そうした心に残る出来事をとおして、日本がその一角を占めているアジアが、諸君にもいっそう身近に感じられるようになったことでしょう。ただ、諸君の卒業の時期と前後して、大型の不況の波が押し寄せてきたために、就職にあたってはなにかと意に反するようなことがあったかと思います。諸君にとっては、辛い試練の時であったかもしれません。しかし、人生いかなる場合にあっても、人は、自らの心の持ちようと精進とで、マイナスをプラスに変えることができるものです。そういう力を、諸君は持っているのです。

去る一月十七日、淡路島北淡町と神戸市を中心とする阪神地方を、巨大地震が襲いました。五千人を超える死者と夥しい被害をもたらしたこの地震の後遺症は今も続いています。本学の学生諸君のご家族の中にも、犠牲になられたかたがたがありました。被害の甚大さと救助活動の必要を直感した私は、すぐさま西村学生部長や体育会の学生諸君と相談して、本学生物生産学部の練習船「豊潮丸」を現地に向かわせることにしました。医師を含む二十三名のかたがたが、食料や医薬品を積み込んで直ちに出発してくださったことは、新聞等の報道で見られたとおりです。

大災害の中で、人と人が助け合うことがどんなに大切かがわかりました。全国の大学生諸君が現地に駆けつけ、必死の救助活動や救援活動を行ったこと、そして今も行われていることは、我々のよく知るところです。このような苦しみや悲しみの中でこそ、言葉だけではない「人間愛」を実感することもできたのでしょう。私は、大学生諸君の若い力に大きな感銘を受けました。

二十世紀は科学と経済の時代といってもよく、科学の発達は人類を宇宙に送り出すことを可能にしました。また、未曾有の経済発展は、人類に多くの夢を実現させました。医療の進歩はまた、人の平均寿命を大幅に延長せしめました。けれども、科学や技術が万能ではないことも、先の大地震で思い知らされました。

科学と経済の大躍進が生み出したひずみの一つに、深刻な環境破壊がありました。今日、我々はようやく環境維持の問題について真剣に考えるようになりました。かつては松の緑が美しく目に映えていた西条の山々も、近年松の立ち枯れが進み、生態系の大きな破壊が、誰の目にも見えるようになってきています。これらの自然が元のように修復されるには、数十年、いやそれ以上に長い年月が必要でしょう。

諸君の一人ひとりが、地球を守るための知恵をしぼり、美しい自然を取り戻すために努力しなければなりません。この、いわば「地球愛」ともいうべき心が、これからは何よりも大切です。諸君の英知によって、我々のこの地球を、より住みやすい環境に戻す努力がなされ、過去の反省の上に立った、持続可能な開発をめざす科学の追求が行われることが、深く期待されるのであります。

さて、いかなる時代にあっても、個人がよりよく生きてゆくための知恵として、我々は常に、「自己の内への投資」をしなければならないでしょう。自らの内面へ目を向け、自分が何を求めているかを不断に追求してゆくこと—目を逸らすことなく、真に自らに直面するとき、諸君は、外界のもろもろの事物や諸現象の意味をはじめて本当に理解することになるでしょう。先に、二十世紀は科学の時代であったと申しましたが、来たるべき二十一世紀は、これに対して「心の時代」だと言ってもよいのではないでしょうか。今世紀、あまりにも外界の変化が大きくかつ急速であったために、自らを問うことを忘れた私たちは、人を敬い、自然を愛で、神を畏れるといった、人間にとって根源的に大切なものを、ついなおざりにしてきたように私は思うのであります。私自身は宗教心もあまり篤い人間ではありませんが、自分の専門である医学を通じてたどりついたところは、やはり、内なる神を求める心でありました。

大切なのは、他に強制されることなく自らを律することであり、そのようにして自らの進むべき方向を見つけることができたときには、一躍、情熱をもって精進すること。そしてこれを継続すれば、何事も叶わぬことはありません。

二十一世紀の担い手である皆さん、どうか、不断に内なるものへと目を向け、自らを磨いていってください。自らを知れば、これから社会に出ていかなる困難に出会っても、必ずやそれを乗り切ることができると思うのであります。

諸君の門出にあたり、今後の諸君の健闘を心よりお祈りして、私の祝辞といたします。

（はらだ・やすお）

特集1 卒業生 修了生 を送る

今年も、多くの学部卒業生、大学院修了生を送り出す季節がやってきた。特に、〝卒業〟という言葉には感傷的な響きがある。大学卒業という人生の大きな節目を迎え、入学してから今日までの学生生活に思いをめぐらす諸君も多いのではなかろうか。

入学した時のあの感動と将来に向けての夢、サークル・クラブ活動、アルバイト、試験勉強、教室旅行、卒業論文作成…など枚挙にいとまのないことであろう。また、大学院修了生にあっては、研究がうまくいった時の喜び、研究がとん挫した時の挫折感、学位論文を作成した時の苦労…などを一つ一つ噛みしめていることであろう。

神戸大学では、このたびの阪神大震災によって、中国人の留学生七名を含む三十九名の学生が死亡した。うち卒業予定者は七人。大学側は、この七人にも卒業式で卒業証書を授与する方針という。これらの学業半ばにして亡くなった学生諸君、卒業を目前にして亡くなった学生諸君のご家族の心中を察すると、いたたまれない思いがする。

西条キャンパスへの統合移転計画も、今月の法学部、経済学部、学校教育学部の移転でもって、予定九学部の移転が完了する。慌ただしい中での卒業となったが、今年も、学長、学生部長、各学部長からは送る言葉を、また、卒業生、修了生からは、旅立ちの言葉を寄せてもらった。

▶地震発生による火災で焼失した被災地

こころのない救援物資は届かない

学生部長 ❖ 西村清巳

卒業、修了、おめでとう。

蛍雪の功なって、晴れて社会人の仲間入りをされるみなさんに心から拍手を送りたい。

みなさんが出て行く社会はめまぐるしく変化する。変化の速度はどんどん加速される。進歩・発展を追い求めるあまり「こころ」を忘れてしまっては進歩が進歩でなくなる。このことを記憶にとどめておいてもらいたい。

今回、地震発生後一週間の兵庫県地震被災地に入ってみて思ったことは、「こころのない救援物資は届かない」ということである。救援物資が山と積まれていたが、これらは「もの」であって、被災者の苦しさや生活を十分にカバーできないように思った。体育館に避難している人、公園のテントに避難している人、子ども、青年、高齢者等々おかれている環境や立場はさまざまである。これらの人々の、顔を洗いたい、歯磨きをする水が欲しい、風呂に入りたい、あったかいものが食べたい、という欲求に応えるのがこころのある救援であろう。ものを送るだけの救援は、相手のこころに届かない。

これから出ていく社会のどの分野で活躍するにしても、環境に対するこころ、日本に対するこころ、世界に対するこころを忘れないようにしてもらいたい。

自分一人だけが、日本一国だけが、人間だけが栄える時代ではないということを、こころにとどめておいてもらいたい。

（にしむら・きよみ）

世界一の学部へ

総合科学部
北山久美

総科に入学してからもう四年が過ぎようとしている。これまで家族や高校の友人たちに、ことあるごとに総科を世界一の学部だと自慢してきた。さまざまな分野の学問を自由に選択できる学部である。自己管理ができなければ、その自由が重荷に変わる学部である。

自己管理、これがなかなか難しい。私は外国語コースに在籍していながら、会話から逃げ回っていた。読みの講義やほかのコースの講義で単位を稼ぐことにばかり頭を働かせていた。総科の「自由」を「楽」に読みかえていた。今私に降りかかる後悔は、自己管理を怠った自分への叱責にほかならない。

しかしそれらの後悔も、ひたすら楽しかった四年間の思い出と、これからの目標を前に萎縮する。総科で学んだことすべてが私の財産であり、その財産を生かしていくことが今後の目標なのだ。

総科を志望していたあの頃の自分を思い出す。卒業を控えた今も、やはり私は総科を愛してやまない。

（きたやま・くみ）

広い視野と柔軟な発想で二十一世紀のリーダーを目指せ

総合科学部長　❖　渡部三雄

卒業生及び修了生の皆さん、おめでとうございます。

一昨年の新キャンパスへの移転、昨年の学部創立二十周年と、総合科学部にとって大きな節目のときを、皆さんは在学中に経験した。多少落ち着かない感じもしたろうが、学生生活の良い思い出にもなったことと思う。

時代はいま、深刻化する地球環境問題、激動する政治・経済・社会情勢、頻発する世界各地の地域紛争、さまざまな大災害の発生などなど、まさに世紀末を象徴する混沌（とん）の中にある。来たるべき二十一世紀に向けて、人類滅亡の悪夢を抱いている人も多いだろうが、そんな悪夢を正夢にしないために、皆さんが立ち向かわなければならない課題は多い。

このような複雑多岐にわたり、グローバルな視点からの考察が求められる課題の多くは、従来の個別科学の枠内でとらえて解決することはできない。既存の学問分野の枠にとらわれず、広い視野に立った学問の総合・融合・再構築を行い、新しい学問、新しいパラダイムを創り出すことが必要である。

総合科学部は、まさにこのような社会の要請に応えるため創設され、学際的・総合的な新しい教育研究の努力を続けている。しかし、切り拓くべき道は未だ遠く険しい。

皆さんが、社会人として、または研究者として、それぞれの立場で総合科学部で学んだことを活かし、広い視野、自由で柔軟な発想と開拓者精神を発揮して困難な課題の解決に挑戦し、今後も私たちと手を取り合いながら、新しい世紀のリーダーとして活躍されるよう期待している。（わたべ・みつお）

最後の願い

生物圏科学研究科
博士課程前期
大村尚

六年間在籍した総科を去るにあたり、教官がたに最後のお願いがある。それは、来たるべき大学改革という名の大地震から我が愛する学部を救ってほしい、ということだ。

現在の他学部の寄せ集め的組織では、学部の分割という大惨事が予想される。これを回避するには、既存学部にはない独自性を打ち出した組織の構築が急務である。果たして、組織の効率化・先鋭化がこの最良の策となりうるのだろうか。今こそ、あなたがたの思想・危機管理能力の是非が問われているのだ。

大学は教官のための組織であり、学生がその運営に加担することはできない。しかし、総科の崩壊は、学生・OBにとって母校を失うことを意味する。あなたがたの就職口以上に深刻な問題なのだ。教官諸氏へ、変革を恐れずに戦う公務員となってこの危機を切り抜けてほしい。我々はただ見守ることしかできないのだから。どうか、この想いが杞憂になることを願って止まない。（おおむら・ひさし）

（本人…西村先生の後ろでVサイン）

「武森研」へ来て五年

生物圏科学研究科
博士課程後期
田頭浩子

研究室にて

広島へ来て五年。学部時代を過ごした金沢での年月よりも、ここでの生活が長くなった。

金沢大学理学部化学科で卒業研究をやっていた四年生の頃、武森研究室から出された論文をセミナーで読んで、どうしてもこの研究室へ進学したくなった。「修士の二年だけ」と言って両親を納得させた。五年前、実験室のどこに何があるか分からず、いちいち先輩に訊ね、後ろをついて回っていた。今では、研究室でもこの界隈でも一番の古株になってしまって、実験室のどこに何があるのかなんて、下宿に居ながらでも言いあてられる。

「博士論文の製本用の原稿をコピーするときには、五年間の研究生活が走馬燈のように頭の中を駆け巡るはずだ」と、あの論文を書いた先輩に言われた。

この五年間、私の研究生活を支えてきたのは、あの論文を読んだとき、論文を読んで初めて面白いと感じた、あのわくわくした気持ちではなかったか、と思うこの頃である。（たがしら・ひろこ）

（本人…左から2人目）

「ホトトギス」
（作品提供＝工学部　島津信子さん）

すばらしい日々

文学部　後藤雄太

「私の大学生活について」というテーマで原稿の依頼を受けたのだが、残念ながら、依頼された方の期待に沿うような文章は、僕には書けない。

もうすぐ卒業を迎えることについては何の感慨もないし、この四年間を振り返ってみても、大した思い出がない。

サークルやバイトに打ち込んできたわけではないし、友人もできなかった。彼女もできなかったし、何か遊びをおぼえたわけでもない。特技や資格を獲得したわけでもないし、車やバイクを手にいれたわけでもない。

僕は、きっと周囲からは笑いものにされていただろうし、変人と思われていただろう。あるいはまともな関心さえ向けてもらえてなかったかも知れない。また、唯一懸命に取り組んだ学業においてさえも、満足のいく成果は出せなかった。

でも、そんなことは全部どうでもいいことなのだ。僕は、まだまだやっていけるはずだ。

（ごとう・ゆうた）

永遠に生きるつもりで働け、今日死ぬつもりで生きよ

文学部長　湯浅信之

今年は、諸君と一緒に私も広島大学を去ることになるので、感慨は一入であるが、諸君を送る私の気持ちは複雑である。これまでの長い努力が実って卒業できるという点では、大変おめでたいことだと思うし、心からお祝いを述べたいと思う。

しかし、社会の荒波に耐えるだけの力を諸君は学び得たかと考えると、少々心許無くなってくるのである。極端なことを言えば、大学は毎年未完成品ばかりを送り出しているから、企業であればとっくの昔に倒産していると言えなくもない。しかしながら、本当の実力は社会の荒波に揉まれて初めて習得できるものなのかも知れない。私が専門に研究しているジョン・ダンという詩人も、オックスフォードを去ってロンドンに出た後、まだ大学に残っている友人に『もう乳離れをしてもよかろう』と書き送っている。

さて、これから諸君が社会に出て活動する際に心に留めて置いて欲しいと思うのが、標題として選んだ十三世紀のカンタベリー大僧正、聖エドマンドの言葉である。

「働くこと」と「生きること」の関係を見事に言い当てた名言であろう。

我々はいつまでも生きると思うから一生懸命働くのであり、それはそれで貴いことであるが、同時に、今日死ぬかもしれないと思って生きていないと、本当の働きはできないものである。

このたびの阪神の大震災を見て特にこの感を強くしたので、諸君への餞（はなむけ）としてこの言葉を贈りたいと思う。私も同じ気持ちで残り少ない人生を生きて行くつもりである。

（ゆあさ・のぶゆき）

本に囲まれた二年間

文学研究科博士課程前期　宮田憲治

「あっという間」という常套句を使いたくないほど、あっという間の二年間であった。それは、文学部の西条への移転にたまたまぶつかったせいである。

他大学から広大の院へと入学して来た私も、当然のことながら、引っ越し要員として活躍させられることとなった。研究室にある埃まみれの本を数千冊扱ううちに、埃のせいでリンパ腺を腫らしたり、鼻をいためる者もあるなかで、なぜか体に不調をきたすこともなく、結局最後まで作業に付き合う形となった。

そのおかげで、履歴書の特技の欄に「段ボール箱作り」と書けるほど、引っ越し作業に慣れ親しんでしまったのだが、それも懐かしい思い出である。また、二年目は図書館のカウンターで働くということになり、そこでも日に数十冊の本を取り扱うこととなった。結局のところ、二年通じて、妙に本とは縁があったことになる。

こんなことを学生生活の思い出として総括するのも変な話だが、惜しむらくは、私が本に囲まれていたのは「勉強」以外の時間であった、ということである。

（みやた・けんじ）

私の大学生活十年間

文学研究科博士課程後期　重迫和美

「井の中の蛙大海を知らず」という諺がある。人の出入りの少ない、のんびりとした井口（いのくち）という土地で育った私は、高校生まではそのような状態だったように思う。

大学時代、慣習、考え方の異なる人々と接することで、自分のそれまでの世界の価値観を見直す機会を与えられた。井の中の蛙は、自分の住んでいる井の境界を発見したわけだ。

同じように目から鱗が落ちた蛙同士で、互いの井をさらに語り合う、という機会にも恵まれた。そのうちに、各自の井の境界は、強固な壁ではなく半透膜であって、互いに浸透しているということもわかってきたのだった。今や、「蛙、井が大海の中に在るを知る」

果たして、この蛙は、大海をも知ることができるのだろうか。今後の課題である。

（しげさこ・かずみ）

信頼

教育学部　松藤　稔

私の所属する国語科は、国語・教育・教師について考えるための十分な環境が整っている。それは、年間の行事をみれば明らかである。研究発表会や夏の合宿など学問を積極的に促す場や、スポーツ大会などの交流の場があり、全て学生の主体的な運営により実施されている。

このことを支えているのは、先輩から後輩への指導、そのなかで築かれた信頼関係によるところが大きい。構成員がその信頼関係のもと、互いに影響・刺激を与え合う姿勢をもっているといえよう。

宮島での新歓キャンプ（本人：後列中央）

私も多くの先輩がたに指導を受け、世話役としての立場で四年間を過ごした。そのなかで学んだことは多く、特にその信頼関係の重要性を痛感した。このような信頼関係、先生がたのご指導による恩恵が、見えない絆として国語科を支えているといえるだろう。

私を支え、導いてくださった全てのかたがたに感謝するとともに、今後、指導者として、大学で学んだ信頼関係の重要性を伝えていきたい。

（まつふじ・みのる）

専攻科の一年間を振り返って

教育専攻科　藤原志保

四月に入学した時のことが最近のことのようにも思えるし、遠い日のことのようにも思える。

四月から今日まで、毎日が目まぐるしく過ぎていき、その日その日を過ごすことに必死であった。そのため時間があっという間に過ぎていった。逆に、経験したことや吸収したことを考えると長い期間であったようにも思う。

四月には、専攻科の学生は一人なので、どのような授業が行われるのだろうかと不安に思ったりもした。しかし今から思うと、一人であったおかげで、どの授業においても自分の興味あることについて、より深められたのではないかと思う。

また、専攻科で一年間学ぶことができたために、新しい先生や新しい友だちと出会うこともできた。私自身の心の受け皿に受けとりきれなかったことも多かったのではないかと思う。しかし、心の底に深く刻まれた楽しい思い出や知識も多い。私にとって忘れられない一年であった。（ふじわら・しほ）

厳しく楽しいレッスン風景

あっという間の二年間

教育学研究科博士課程前期　住岡敏弘

大学院に入学してから二年、あっという間であった。一年目は比較的楽しく、暢気に暮らしていた。しかし、年が明けても修論のテーマが定まらず、だんだんあせってきた。

二年目に入る直前になって、先生の親身なご指導により、「ようやく研究テーマが明確になってきたぞ！」と思ったのも束の間、修論構想発表会、学会発表と、あれよあれよという間に二年間が過ぎてしまった。

私の力不足から、この二年間で目に見えるほど成果が上がったとはいえないが、自分なりにこれからの研究の方向性のようなものが見えてきたことが、この二年間の最大の収穫であったような気がする。

こんな私がここまで来れたのは、私を温かく励まし親身に指導してくださった先生、先輩諸氏、後輩の諸君のお陰であり、心から感謝している。（すみおか・としひろ）

M2 リザーブ友の会コンパにて（本人：後列右端）

教育するためにはひとは何ものかでなければならない

教育学部長　小笠原道雄

教育学部を卒業される諸君、教育学研究科を修了する諸君、卒業、修了おめでとう。

諸君を実社会に送るに際し、私の胸を去来することは、十九世紀オーストリアの小説家、アーダルベルト・シュティフターの次のようなことばである。「教育するためには、ひとは何ものかでなければならない。各人が何ものかであるとき、かれは容易に教育できる」と。

諸君が教育学部の学生、大学院生としての修学中、本当に「何ものか」になったのか。真に人間として「何ものか」を身につけ、変容したのか、それに対する畏れにも似た気持ちを、私は今抱いている。

「何ものか」の内容を示せば、それは広く教育者としての人格であり、古風ないい方であるが、教育者の徳とでも呼ばれるものであろうか。具体的な内容とその性質を示せば、教育上の愛、忍耐、信頼ということである。

諸君がこれからの社会で、とりわけ教育者としてその努力が認められるために身につけなければならなかったことは、まさにこの三者によって体現される人格なのである。

諸君の実社会での健闘を心から願っている。

（おがさわら・みちお）

学位論文を書き終えて

教育学研究科博士課程後期
尾西康充

今春、博士課程後期を修了することになった。学部生の頃からご指導いただいた相原和邦先生には、その学恩に感謝するばかりである。

日本語教育学科の先生がたはもとより、教育学部の他学科、さらに文学部国文学研究室の先生がたにもご助言を賜ったり、研究上の便宜をはかっていただいた。あらためて厚く御礼申し上げたい。

まだ駆けだしたばかりの研究生活ではあるが、若輩の私の目に映った「学会」―特定のイデオロギーに基づいて「是々非々」の議論を信条としてきた者は、すっかり意気消沈する一方で、後ろめたさを感じながらも「良識派」を自称してきた者は、妙な開放感を味わっている―。

ある文芸評論家は、三島由紀夫の自決（七〇年）を以て昭和は終わっていた、と嘆息するが、私はまさに「思想の終焉」したといわれる時代に育ってきた。しかし、「個」の感度を高めておく必要は変わらないであろう。近代的「自由」、「平等」に対してアレルギー症状をおこしている現代において。

（おにし・やすみつ）

右：恩師の相原和邦先生　左：筆者

私の大学生活について

学校教育学部
養祖宇都

心を躍らせて新しい大学生活をスタートさせたのは、もう四年も前のこと。あれから私はサークルに、バイトにと危ない橋を渡りながらも、無事、卒業を迎えることになったが、学生生活のなかで一番の思い出となったのは、やはり四年生の時の教育実習と卒論であった。

昨年八月、岡山県北房町で、猛暑の中を汗だくになりながら、山の中を歩きまわって地質調査・岩石採集に明け暮れた。調査から帰るとすぐに二か月間の教育実習。夜遅くまで授業の準備をみんなで助け合いながらやり、昼間は子供たちと活発に活動する、楽しく充実した日々を送った。

実習が終わるとすぐ、夏に採集してきた岩石の薄片の作製、顕微鏡観察と、地道で細かい作業が続いた。「調査したデータから、今度は自然に帰して考える作業なんだ」という先生がたのお言葉どおり、最終的に大きな地質構造が解明されたときには、深い感動を覚えた。

四年間の学生生活を送った東雲キャンパスが、私たちの卒業とともに消えゆくことは、本当に感慨深い。今後、学生生活で得た多くのものをずっと大切にし、西条新キャンパスもたびたび訪れたいと思う。

（よおそ・うか）

東雲キャンパス最後の卒論発表会を終えて（地学研究室の同級生とともに。左から5番目が筆者）

学部も東雲を巣立つ

学校教育学部長　間田泰弘

卒業、修了おめでとう。

卒業、修了は、新たな出発点に立ったことと考えればあまり楽観はできないが、今日を迎えることができたのは、君たちのさまざまな努力の成果である。

しかし、どんな人でも一人で成長したのではなく、周囲の力添えや、寛容があったことも忘れてはならない。過去を振り返ってみると、教えられたこと、ほめられたこと、恵まれていたこと、叱られたこと、制約されたこと等、有形無形のさまざまな体験があり、それら全てによって育てられたことに気づく（せっかく体験していてもその長所や恩恵に一生気づかないこともあるが）。

大学では、これらの体験は、勉学、教官との接触、交友等をとおして得られることが多いが、学部の雰囲気に取り囲まれていたことも大きな体験になっている。これは代々積み重ねられてきた一つの伝統であり、知らず知らずのうちに影響を受けているが、影響を受けた本人も時が過ぎてみると一役を担っている。

本学部は、昭和十六年にこの地に移転されており、東雲における伝統はそれ以来半世紀以上にわたって培われてきた。

その学部も、周知のとおり君たちと同じ年に東雲を巣立つ。この地での伝統は、君たちによって最後が積み重ねられ、君たちによって締めくくられることになる。

しかし、東広島に移っても、君たちが築いた東雲のよき環境、よき雰囲気は失われることなく、いつまでも引き継がれることであろう。目標はそれぞれ異なるけれど、学生時代のよき体験を生かし、さらに充実・発展されるよう祈念している。

（まだ・やすひろ）

雑感

特別専攻科
三崎憲治

小学校の現場での悩みの解消と、自分のこれまでやってきたことを問い直す為に、特別専攻科の門を叩いた。現場での障害児教育は、専門的な知識や経験のない教師が、意欲と人配上の都合で担任している場合もある。

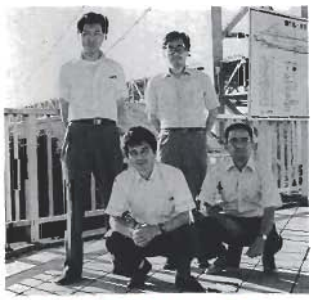
専攻科での授業は睡魔との闘いでもあったが、「なるほど」と納得できることが多く、充実した一年であった（忘れようにも思い出せない）。

知識があれば先の見通しが持て、弊害を最小限にくい止められる。多くの学生が、障害児教育の講義を受けているのを見て、心強く思った。

理論なき実践は混乱を招き、実践なき理論からは人は離れる。知識の豊富な学部生諸君、教員ではなく、教師になれ。教えることのプロではなく、学ぶことのプロになれ。

講義は、学生の質とニーズによって構成される。己を律し、私語を慎み、時には「命について」「人間らしく生きるとは」などについても考えて欲しい。養護学校の子どもたちと同じように。

（みさき・けんじ）



（本人…左から2人目）

私にとっての手話通訳

学校教育研究科修士課程
堀川淳子

それをフィールドワークと呼ぶにはおこがましいが、聴覚障害児教育を志す私にとっては、手話通訳は絶好の実習であった。

手話通訳では、主に手話を通して聴覚障害者の情報のやりとりを手助けする。この手助けという意味で、「手話通訳」といえば「ボランティア」、「奉仕」といったイメージが強い。しかし、私にとっては、手話を通じて得た、いや、手話を知っていたからこそ得ることのできた「人との出会い」という意味合いの方が強い。そこで出会った聴覚障害者とのふれあい、話し合いを通して、さまざまなことを教えられた。

また、手話通訳は、何かを「してあげる」ものではなく、いままで知らなかった何かを私の方が「与えられる」ものなのだということも、改めて感じることができた。

大学院の研究室で行うデスクワークも必要だが、教育に携わろうとする者の基盤は、やはりフィールドワークである。

（ほりかわ・あつこ）

（本人：左端）

『水は流れ…』

法学部長　辻　秀典

卒業、修了おめでとう。

というと、返ってくる答えは、「とんでもない。気楽な学生でずっといたいですよ」とおおかた相場が決まっている。君たちの答えもそうであろう。例年になく就職に苦労し、社会から手荒い挨拶を受けた君たちだから、その思いはひとしおかも知れない。

世間は甘くない。その通りだが、しかし、ひるむことはない。君たちの先輩が身をもって示しているように、世間をわたる力は十二分に君たちにはある。サラリーマンの仕事もそう捨てたものではない。命を削るほど人を引き付ける魅力をもっている。大事なことは、自分はたかだかこんなもの、会社、社会はこんなもの、と決めてかからないことだ。

思いもかけぬ力を君はもっているし、また、会社も、社会も変化する。産業発展を大呼してきたあの通産省でさえ、今や、企業、企業人は、ただ強いのではなく、強くて優しく気品がなければならない、と言い始めているのである。

あきらめないでほしい。あせらず、じっくりとやってほしい。人生は八十年とたっぷりある。

東洋の智者もいっているではないか。

「水は柔軟で　つねに流れる
流れて　強大な岩に時とともにうちかってゆく
つまり　動かぬものがついに敗れる」。

（つじ・ひでのり）

"宝の山"

法学部　宮迫啓介

「宝の山へ入りながら手を空しくして帰るは、心（しん）の眼の無き故なり」

高校時代の恩師が事あるごとに口にした言葉である。

人生最大の夏休みである大学生活を終えようとしている今、この広島大学という宝の山で、自分は何をつかみ何を感じてきたのだろうと振り返ってみると、最大の宝は、生涯の友を得たことであろう。

夜を徹して酒を飲みながら、互いに悩みを相談しあった友、大学祭でともに汗を流した友、キャンプ・ツーリング・カヌーと子どものように駆け回った友。「きっと今しかできない」と友と過ごした有意義な時間も、掛け替えのない宝である。

短くもあり長くもあった大学生活だったが、友という宝を手に入れたのだから、「心の眼」を持っていたということか。とりあえず最大の夏休みである「非日常」にケリをつけよう。

カッコよく、さりげなく、なんとなく、思わせぶりに、「ひきぎわ」を飾ろう。

（みやさこ・けいすけ）

ソフトボール大会で（前列左から3番目が本人）

鉄道法制の研究を始めて

社会科学研究科
博士課程前期
田坂徳義

大学院は、受動的であることが許されたこれまでの勉強とは異なり、自ら課題を設定して、その課題の研究に能動的に取り組むところである。

社会科学研究科法律学専攻に所属する私は、入学前から運輸に関する研究をしたいと考えていたが、実際に研究課題を絞り込む段階では、幾多の困難が待ち受けていた。

行政法で扱うことができる対象は、自ずと限られており、紆余曲折を経てアメリカの鉄道法制を題材とすることになった。アメリカの鉄道法制は極めて複雑であり、他大学へ出向いてみても十分な資料収集ができなかった。また、関連する法律の規定をつなぎ合わせて読むだけでも、容易な仕事ではなかった。

いずれにしても、アメリカの鉄道法制に関する研究は、博士課程前期においてその第一歩を踏み出したところである。

今後のいっそうの精進を深く心に期するとともに、今回の修士論文を取りまとめるにあたり、適切なご指導を賜った先生がたに心からお礼を申し上げたい。

（たさか・なるよし）

樋口陽一教授を迎えて
（最後列右から3番目が本人）

広島での研究生活

社会科学研究科
博士課程後期
彼谷　還

大学院の仲間（前列左端が本人）

九〇年四月―広島での生活が始まった。名古屋時代の思い出をあとに、自分で決めたとはいえ、見知らぬ土地での研究生活は不安そのものであった。

しかし、大学院の忙しさは、そんな感傷をまたたく間に吹っ飛ばしてしまった。院生の絶対数が少ないため、ゼミ形式の授業では報告が次々に回ってくる。他大学からゲスト講師を招く集中講義に至っては、かなり前から準備も必要になる。もっとも、東大の樋口陽一教授をはじめ、めったにお目にかかれないかたがたの講義に参加できたのは、大きな収穫である。

ほかにも、二か月に一度、中四国地方の研究者が集う「公法研究会」の開催など、やるべきことは多い。

そんななかで、少しでも納得のいく論文を発表していくのは、かなりきつい作業である。だが、院生みな同じ境遇。互いに励まし合いながら、ときにはコンパで発散し、ときには議論を闘わせる。

まだしばらく広島での研究は続くが、名古屋とは違った思い出ができつつある。（かや・たまき）

私の収穫

経済学部　田中大介

私の大学生活は、あまり他人に自慢できるようなものではない。特別勉学に励んだというわけでもなく、その他のことで何かに打ち込んだというわけでもない。おまけに一年留年までしてしまった。

全く、最高学府まで来て何をやっているんだ、という感じの学生だったわけだが、こんな私にも、自分だけが満足している大学生活を通しての収穫というのがある。

それは、自分の将来について本当にやりたいことを見つけられたことである。これは、見つけそうで、なかなか見つけられないものではないだろうか。

本人…後列中央でマイクを握っている

私の大学生活は、振り返ってみると、自分を見つめ直した五年間だったと言える。ちょっともったいないような気もするが、世の中全体が生き急いでいる感のある現代に、私のような人間がいても良いだろう。私の人生においては、これからが、夢に向かっておおいに邁進する時期である。

こんな私を温かく見守ってくれ、理解を示してくれた両親、先生、友人たちに感謝したい。

（たなか・だいすけ）

広島大学の六年間

社会科学研究科博士課程前期　チョン・ギンテク

広島大学で過ごした六年間の生活は、もうすぐ終わろうとしている。これから、私は広島を離れて、社会人として新たな生活を始める。

広島大学での生活が終わるとともに、この六年間のことがしみじみと思い出されるようになってきた。

振り返ってみると、学部の一、二年次は、比較的辛かった二年間である。この二年間は、勉強のことを心配するだけではなく、生活に必要な費用も気にかかって、たくさんのアルバイトをしなければならなかった。三、四年次のときには、奨学金の助けもあって、この二年間は、学業に専念しながら生活を楽しく過ごすことができた。

そして、学部を卒業した後、私は大学院に進学したが、大学院にいた二年間はたいへん目のまわるような忙しさであった。最初の一年目は、個人発表とレポートに悩まされたものの、専門知識を吸収することができて、非常に充実した年であった。最後の一年は、就職活動をしながら修士論文に取り組んだ。この一年において、私は、自分で文献収集、分析、そして論文作成を通して、研究の方法論を身につけることができた。

最後に、六年間お世話になった先生がた、先輩たち、親友、日本の友人の皆さん、そしてともに努力してきた仲間たちに、心からお礼を申し上げたいと思う。

個と全体の調和

経済学部長　佐野進策

経済学部卒業生の諸君、卒業おめでとう。

諸君の大部分は、卒業後、民間企業か地方自治体で働くことになり、いわゆる組織の中の人間となる。諸君は、人生においてもっとも自由を謳歌したであろう学生生活に別れを告げて、社会人への第一歩を踏み出すのである。

基本的人権とか自由の尊重が、これほどまでに喧伝されたことのないこの時代にあって、古くして新しい命題である「自由と規律の調和」「個と全体の調和」といった、一見相反する命題に、絶えずぶつかり、悩まされることであろう。

利己的存在といわれる国家ですら、今日では、自国のみの国家主権の主張や国益の追求は許されず、各国との共生と人類の繁栄につながる世界経済のグローバル・システムの構築をともに模索しなければならない時代である。

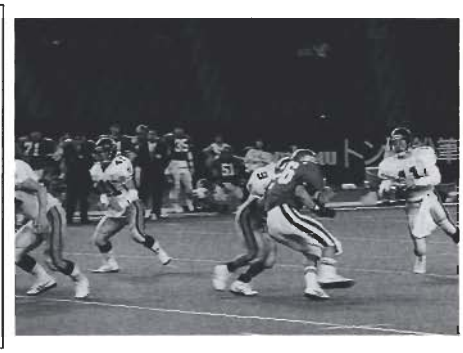
どうか、常に柔軟な発想をもって、組織とその構成員をともに躍動させるような人間を目指して頑張ってほしいと思う。

諸君の健康と活躍を、切に祈る次第である。

（さの・しんさく）

大学生活＝アメリカン・フットボール

理学部　桂　寿人



私の大学生活は、アメリカン・フットボールそのものだったと言っても過言ではないと思う。高校三年の時に、「広島大学地区王座優勝」という新聞記事を目にし、広大に行ってアメ・フットをしようと決意して四年間、とにかくアメ・フットに打ち込んだ。

幸いにも、四年目の最後の年には東京ドームに行き、地区王座決定戦で優勝し、二度目の大学地区王座に輝き、有終の美を飾ることができた。そのおかげで余分に大学生活を送ることになったが、まったく後悔していない。社会人でもアメ・フットを続けることになりそうだが、また一から頑張りたい。

ただ残念なことは、わがフットボール部は、大学側にはあまり評価していただいていないようである。地区王座についた大学は、西日本では広島大学のみである。文武両道を掲げている広島大学である。照明設備の設置、ウエイトトレーニングルームの充実、チームドクターの確保等、永続的に体育会が発展するためにも、もっと力を、お金を注いでいただきたい。

最後に、五年間何も言わずに援助し続けてくれた両親に深く感謝する。

（かつら・ひさと）

変革期に生きる

理学部長　西川恭治

理学部を卒業、または理学研究科を修了する諸君、まずは、卒業・修了おめでとう。

諸君がこれから活躍を期待されている社会は、今大きな変革期に入っている。政治・経済はもとより、地球環境・生活環境、更には学問や人間の価値観までも大きく変わりつつある。

同じような大きな変革を、我々日本人は半世紀前の敗戦でも経験した。ただ、このときの変革は外的要因によってもたらされたものである。これに対して、近年の変革は、むしろ内的要因によっているところが大きい。それだけに、この変革期を生き抜いていくためには、自分自身の頭で考え、自分で先へ進む道を判断し、探し出していかなければならない。

このような変革期を的確に生きるためには、まず既定観念に捕らわれたり、特定の視点に閉じこもらないことが必要だと思う。何事にも表と裏がある。「楽あれば苦あり」「禍を転じて福となす」の諺にもあるように、一方の側面だけを見つめて楽観的になったり悲観的になったりせず、いろいろな側面から判断して、柔軟な思考で冷静に事に対することを勧めたい。そして、その柔軟で冷静な判断や思考を進めて行くうえで、諸君が在学中に学んだ基礎科学の手法が役立つことは間違いない。

（にしかわ・きょうじ）

西条への移転

理学研究科博士課程前期　大西綾美

理学部が移転したのは、学部三年の秋だった。夏休みに実験器具の荷作りに駆り出され、不平を言いながら作業に取り組んだ。東千田キャンパスの学生実験室は、昼間でも薄暗く、壁はぼろぼろと崩れ、蛇口からは茶色い水の出るような所だったが、妙に愛着があった。今は閉鎖されているようだが、修復して保存して欲しいものである。

移転も無事に終わり、いざ西条へとやってきたのだが、なんともここは凄い田舎である。最近は少し開けてきたが、当時はまだブールバールも貫通しておらず、お店もほとんどなかった。自転車でデパートや映画館にいってた頃が懐かしい。

しかし、西条には誘惑されるものがないので、勉学に励むには最適の環境である。修論に追われる日々、クリスマスだ、お正月だ、という街の喧騒はここまで届かない。この原稿を書いている今も、辺りは静まり、気温は氷点下五度。西条の夜はしんしんと更けてゆくのであった。

（おおにし・あやみ）

修了を前に

理学研究科博士課程前期　小田明生

東千田キャンパス学生実験室，移転作業中
（本人：前列右端）

平成元年に広大に入学して六年が過ぎ、長かった学生時代も終わろうとしている。大学入学時には、これでしばらく落ち着いて遊びでも勉強でもできると思っていたが、あっという間に修了が目前に迫ってしまった。

特に、研究室に配属されてからの三年間は、院試、学会、その他のイベントがあり、まだまだ研究は不十分なのに修論を迎えたという感じがする。この間、研究については、どういった方向へ発展させようか常に迷いながらやってきたが、その時その時で精いっぱいやってきたつもりなので、その点では満足している。

また、趣味であるウィンドサーフィンを始めたのもこの時期で、休みの日には、夏はもとより、冬でも研究室のみんなに呆れられながら、ドライスーツを着込んで海に行ったことがいい思い出となっている。

最後に、順調とは言えなかった私の研究を温かく見守ってくださった先生がた、及び両親には心から感謝したい。

（おだ・あきお）

大島へのゼミ旅行で（本人：後列中央）

一に挨拶、二に掃除

医学部長 ❖ 調枝寛治

医学科六年、総合薬学科四年の間に教えられる医学・薬学の情報量は、年々増えている。基礎的な知識から最新にして最高の医学・薬学を学んで、いま卒業を迎える諸君でも、まだまだ医療現場では何もできない。

医師・薬剤師という専門家、あるいは医学薬学の研究者になるための本格的な研修は、これから始まる。卒業後の最初の二、三年間に習得する知識や技能は、その人の将来を左右するぐらいに多く、しかも重要である。卒後の初期研修には、あらゆることに眼を向け、耳を傾けながら、自分の進む道を見つけてほしい。そして、目まぐるしく変わる時代を生き抜くための高度な能力を身につけていただきたい。

いま社会が求めている医療の専門家は、最新で最高の医療技術をもち、病める人にとって最善の方法をとってくれる人である。生活環境や習慣の異なる患者一人ひとりにとって、いつも最善の対応ができる医療専門職としての感性が求められている。医療専門職の感性は、真っ当な人間の感性でもある。

医学部に入った時、すでに医療に携わる者としての高い目的意識と強い使命感、それに立派な感性を備えている者もいるが、研修期間中に努力しなければならない者も少なくない。医師としての本質的な、職業的なことに関するマナーよりも、残念なことだが、「初歩的な、社会的常識ともいうべきマナーをきちんとしてほしい」と言われることが多い。

将来の大成をめざして、社会人としての第一歩はまず、「一に挨拶、二に掃除、三、四がなくて、五に愛敬」で頑張ってほしい。

（ちょうし・かんじ）

大学生活を振り返って

医学部 柿沢秀明

残り一か月で、長かった大学生活が終わろうとしている。

大学生活を振り返ってみて、この間に多くの人と出会い、知り合うことができたことが、何よりも自分にとって大きな財産である。

大学の同級生、クラブの先輩・後輩など、多くのかたがたと知り合い、そして共に活動することによりさまざまな経験をし、そのなかで学ぶことがとても多くあった。

また、大学生というのは時間が多大にあり、しかもそれを自分で自由に使えることができ、多くの思い出を作ることができたことは、とても嬉しいことである。

学生の本分である勉学の面では、努力が足りず、全くといっていいほど精彩を欠いていたが、最低限、三月の国家試験には合格する為、残り三か月ぐらいは自分でもよくやったと思える程勉強して、これが学生生活の最後の、苦くて良い思い出になればいいと思っている。

（かきざわ・ひであき）

最も楽しかった遠征の一つ，旭川スタルヒン球場にて（右から２人目）

大学時代の出会いから

医学系研究科博士課程前期 大村徹男

広島に来て、九州の訛りが気になりだした頃から私の大学生活は始まった。思えばこの六年間は、多くの人との出会いにより有意義なものであった。

教養課程で印象深かったのは、平和学講義の先生がた。平和とヒロシマに対する多くの解釈の仕方に考えさせられた。専門課程では先生がたに支えられ、薬に対する幅広い視点を持つことができた。個人的には、漢方薬を紹介してくださった神田（ミワダ）先生にもお世話になった。

アルバイトでは、バーのマスターとお客さんたちが印象深い。彼らには、人を見る目や社交場の楽しさを大いに勉強させていただいた。

もちろん、サークル活動も忘れられない。同じ映画サークルの仲間とは、よくドライブから合コンまで行動を共にしたが、一番の思い出は自主映画の製作である。人、金、時間はかかったが、監督業は自分の個性、感性を作品にぶつけることができた。作品を通じての出会いに恵まれたことも、私にとって幸せであった。大学時代に出会った人に感謝したい。

（おおむら・てつお）

東京の映画祭で映画プロデューサーたちと

顕微鏡との出会い

医学系研究科博士課程 土肥大右

卒後五年目の私は、平成三年四月大学院生として帰局した。整形外科の院生は、最初の一年間は外来と病棟をかけもちしながら並行して研究を行い、二年目から本格的な研究に取り組むのが通常である。

私が教授からいただいたテーマは、「筋ジストロフィーマウスへの血管柄付遊離筋肉移植の実験的研究」であった。この時が、私と微小外科の初めての出会いである。今まで顕微鏡視下に糸さえ結んだことがなかった私は、直径〇・五ミリの血管縫合に何度も挑戦し、失敗を繰り返した。実験を始めてから三か月目に、初めて動脈と静脈が開通した時の喜びは、今も忘れることができない。

あれから三年。多くの先輩がたにご指導をいただき、無事学位を修得し、臨床面でも、母指切断の手術を執刀させていただく機会を与えていただいた。

振り返ってみると、私の四年間は顕微鏡との出会いから始まった。修了を前に、実験室に漂うホルマリンの臭いが懐かしく思われる今日この頃である。

（どひ・だいすけ）

同級生のみなさんへ

歯学部　中田・正樹

手術風景（本人：中央）

今、この文章を書いている時点では、私は修了生ではない。「私の記憶が確かなら―」遠い昔に高校を卒業したときに何か「晴々とした寂しさ」を感じたのを覚えている。再び卒業という儀式に感動を覚えるのだろうか。

歯学部という、大学の中ではややもすると非常に閉鎖的な環境のなかで、私たちは六年間も過ごしてきたのだ。確かに固定されたメンバーと過ごした時間は、すべてがすべて安穏とした日々ではなかったが、過ごしやすく平和な時間であったに違いない（これは「日々、娯楽に興じ安穏と過ごした結果、試験前につけがまわって死にそうになる」という表面的な意味では決してありません。はい）。

この平和な生活を出て、忙殺されそうになったとき、優しかった時間を思い出せば、優しかった自分に戻ることができる。大学生活とはそんなものなのかもしれない…などと自分に浸っている場合じゃなかった。今は勉強、勉強！

（なかた・まさき）

平成6年12月クラス忘年会（本人：左から2人目）

四年間

歯学研究科博士課程　山村辰二

今、一つの山を登り終えようとしている。私にとっては、とても高くて険しい道程だった。ようやく山を登り終え、ふっと安堵の溜息をつき前をみると、もっと高い山が聳え立っていた。どうしようかと迷っている自分がいる。後ろを振り返ってみた。よし登るぞ、と決意を固めた自分がいる。今、登り終えようとしている山での経験無くしては、次の山は登れない。

人生の途中にいる私にとって、この四年間の大学院生活は、自分の未来への大きな自信となった。研究を通じて、人間とは何かということを深く考えたような気がする。一人の人間として、本当の意味での正しいことと間違っていることの分別ができる人間になることを教わった。四年間一日一日の全てが、思い出のアルバムとして私の頭に残っている。その思い出を大切にして、次なる山に向かって頑張ろうかな！

最後に、私を指導してくださった先生がたに厚く御礼を申し上げます。

（やまむら・たつじ）

「ジンジャー」
（作品提供＝工学部　島津信子さん）

初心忘れるべからず

歯学部長　杉中秀壽

歯学部を卒業、歯学研究科を修了する諸君、卒業、修了おめでとう。

諸君らは、今やっと、社会人としてスタートラインに立ったばかりである。これからは、今まで六年間学習し身につけた実績あるいは四年間研究してきた成果を実践に移さなければならない。

この期にあたって、一度標題の言葉の意味を考えてみようではないか。この言葉の由来は、世阿弥の「花鏡―奥段」にある「初心不可忘」による。元来は能楽で、習い始めた頃の芸や、その頃の未熟さ、また修練の各段階での最初の経験を忘れてはならないという戒めの言葉である。

学生時代に初めて受けた各々の講義・実習で味わった未知の学問分野への期待と感動、特に初めての解剖実習でご遺体に対面した時のあの畏敬の念や、臨床実習で患者さんに初めて接した時の心境などを、決して忘れないでもらいたい。

我々はともすれば過去のことを忘れ、目先のことにのみ対応しがちである。確かに最近の科学の進展には目覚ましいものがあり、これに即応して新しい医療技術の習得や最先端の研究を推進することを目指さなければならない。が、時には学生時代のあの初体験のことを思い出していただきたい。

現在、医療に携わる者には生涯学習が求められている。卒業後も、常に新しい知識と技術を学び、高度歯科医療を遂行できる指導的立場の歯科医師が生まれることを、心から期待している。

（すぎなか・ひでかず）

旅行先で一緒に寝泊りしたマレーシア人（両端）と

君に乾杯！

工学部　真鍋顕作

僕が初めて君に会ったのは、一年生の春だった。それまでも見かけたことはあったが、遠くから見ているだけだった。特別な感情があったわけではない。

ある日先輩から紹介され、僕はあまり乗り気ではなかったのだが、とりあえず付き合うことにした。君は先輩に後押しされるようにどんどん僕に追ってくるけれど、僕はあまり気分が良くなかった。それから二週間に一度くらいのペースでぼくらは会った。でも会うときはいつも大勢集まったところで、と決まっていた。決して、僕は自分からは誘わなかった。

それが、西条キャンパスに移ってからくらいだろうか、僕は君の魅力に気づき始め、夢中になっていた。君はみんなを楽しくさせた。君は僕のところに仲間と呼べる人たちを連れてきてくれた。今、心から感謝しよう。君に出会えてよかった。これからもずっとそばにいて欲しい。そばにいて僕を酔わせ続けて欲しい。

酒よ、君に乾杯！

（まなべ・けんさく）

主役は君たち

工学部長　❖　茂里一紘

卒業、修了おめでとう。いつものことながら、卒業証書や修了証書を手にした君たちの晴れがましい姿は、正直言って私には大変まばゆく見える。四年間、あるいは六年間、一緒にやってきた者を見送る寂しさがそう思わせるとともに、私には、「主役は君たち」という思いがあるからであろう。主役を前にしてまばゆいのである。

君たちが大学で学んだことは微々たるものである。君たちの多くが関わる技術の世界は、基本的には、これまでの経験や積み重ねが重視される世界である。いわんや、技術は高度化複合化している。君たちの存在はその意味では取るに足らない。

そのようなことを承知のうえで、私はそれでもなお、「主役は君たち」と思っている。有限を前提とした技術、国際環境の中での技術、社会との関わりの中での技術など、技術はこれまで経験しなかった環境の中で展開している。そんななかで、新しい視点と発想をもって発言し提案する技術者になって欲しい。

新しい提案には不確定な要素が伴う。なればこそ、これまでに増して勉強しなければならない。そして一歩でも実現させ、新しい技術の中心となって欲しい。それができるのは君たちである。

（もり・かずひろ）

広島の六年間

工学研究科博士課程前期　鈴木厚弘

時代が「昭和」から「平成」へと変わったその時、宮崎の田舎町にいた丸坊主の少年は、その年の四月に広島にやって来た。道路を走る路面電車に感動し、冬に雪が降るのを見て感動し、あっという間に六年が過ぎた。

学部の四年間はラグビーボールを追いかけた。そして残り二年の大学院生活。六年たった今、少年は青年へと変わっていた。では、少年を青年に変えたものはいったい？…。

クラブ活動？　研究室生活？　それも含めて日常のちょっとしたつまらないことの積み重ねであったように思う。このつまらないことのなかに大切なことがたくさん含まれているはずだ。それを糧に、青年はまた違う土地でがんばろうと決意している。でも、研究室の自由な雰囲気に甘えすぎた、と反省もしている。

研究室の花見にて

最期に、わがままな少年を温かく見守ってくださった先生がたをはじめとする多くの人々に感謝します。

（すずき・あつひろ）

研究室での五年間

工学研究科博士課程後期　豊田英志

五年間に及ぶ研究室生活が間もなく終わろうとしている。思えば、学部四年のころは研究室での毎日が新鮮な驚きの連続であった。しかしその頃の僕というのは、大抵の人がそうであるように、自分の眼前に「どん」と据えられた課題をこなすのに手一杯であり、その研究の背景、全体像の把握などはほとんどできなかった。現在のように高度に専門化された自然科学分野においては、こういった状態を通らねばならないことは、当然の成り行きといえる。

やがて修士、博士と課程を移っていくにつれて、徐々にではあるが、自分の研究というものが分かってくるようになった。僕にとっては、そういった、研究を自分のものにしていく（少なくとも自分でそう感じるレベルまで）課程を学んだことは、貴重な経験であり、博士後期まで進んで良かったと思うのである。

そして、研究を行う者にとって

最も重要なことは、知的好奇心から生ずるテーマに対する思い入れと執着心ではないかと、今更ながら強く感じる。（とよだ・えいじ）

研究室の仲間と（右から2番目が筆者）

みんなが一つになれた豊潮丸での乗船実習

生物生産学部　川﨑恭子

私の大学生活四年間で一番の思い出となるのは、豊潮丸での乗船実習である。沖縄への十一日間の船旅で、沖縄に滞在したのは二日間、残りの九日間は、見渡す限りの青い海と空に囲まれた船旅。クルージングと沖縄での楽しいアバンチュールが私たちを待っているはずだった。

しかし、その甘い考えとは裏腹に、現実は東シナ海で木の葉のように揺れる豊潮丸。吐くのでほとんど何も食べられず、一日一錠の酔い止め薬が効かなくなり、一日二錠になり、最後には薬まで吐いてしまう有り様。しかも船旅と言っても、三交代で一日八時間のワッチと食事当番が、みんなをすっかり寝たきりにしてしまった。しかし、十一日間、共に苦しみ、助け合って、すばらしい体験をし、無事に呉に着いた時には、深い友情と堅い絆が生まれていた。何年後かにみんなと再会したときには、きっと豊潮丸での多くの思い出が語られるはずである。

（かわさき・きょうこ）

（本人：前列左から3人目）

ひとりの人間として

生物生産学部長　❖　岡田育穂

生物生産学部を卒業する諸君に心からお祝い申し上げる。

四年前、諸君が希望に燃えて、この東広島の地に来て以来、広島大学の学生として過ごした青春時代の年月はどうであったであろうか。「時過ぎゆくに非ざるなり、われら過ぎゆくなり」とは西欧の詩人の言葉であるが、勉学の成果が実り、いま社会へ巣立ってゆこうとするとき、感慨もまたひとしおのことと推察する。

大学時代の四年間は、親元を離れて、半ばは社会の風にも触れ、半ばは大学という囲いの中にあって、いわば社会へ巣立つための助走の時代といえる。この間、諸君は友と語り、人生について考え、また多くのことを学び、かつ経験したに違いない。

今、大学生活で得たものを糧にして、社会へ巣立ってゆく諸君に希望することは、どのような状況のもとにおいても人間性を失わないように心がけてほしい、ということである。

人間とは弱いもので、社会へ出て組織の中に入ると、知らず知らずのうちに、組織の歯車的な感覚に陥りがちになる。時には一歩さがって、組織の外から物事を考えるような習慣をつけることが、人として生きてゆくうえに大切なことと思う。

ともあれ、この激動の時代に社会へ巣立ってゆく諸君の前途に、幸多からんことを祈る。

（おかだ・いくお）

大学・大学院生活を振り返って

生物圏科学研究科博士課程前期　藤木郁久

「ドンドンドーン」宮島で打ち上げられた花火から私の学生生活が始まった。

フェローとして参加した二度目のオリキャン、スポンサー集めなどの資金づくりから企画・運営などすべて自分たちの手で行った西条祭・酒まつり、指導案作りに追い回された福山での教育実習、異文化を肌で感じた中国・韓国・香港旅行、時には時間の経つのも忘れて深夜におよぶこともあった研究室での卒論研究・修論研究、自分の行っている研究がどれほど注目されているかを実感することができた学会発表、と院生時代の二年間を含めた六年間に、大変貴重な経験を得ることができた。

「大学生活は他人より与えられるものではなく自分から求めるものであって、何事も積極的にやってみることが大切である」ということを実感した。

私は、今春より理科の高校教師として教壇に立つことになった。この広島大学で学んだ経験を高校生に伝えていきたい。そして、教え子にぜひこの広島大学への進学を勧めたい。

（ふじき・いくひさ）

お酒を片手に夜遅くまでディスカッションした研究室のメンバー（本人＝後列左端）